11月22日　王であるキリスト　マタイ25章31～46節　小さな神の国から大きな神の国へ

きょうは年間最後の主日、王であるキリストの主日です。今週で一年の典礼暦が終わるので教会の大晦日ですね。教会は世界の始まりから終わりまでを一年で祝うので、世の終わりに再びこの世に来られる主を記念するのが今日の主日です。

「王であるキリスト」と名がついているので、年間主日とは違う特別な日のように思えますが、福音は先週に続く箇所です。これまでのたとえを使ったイエスの教えの締めくくりと言えるでしょう。

「最も小さい者の一人にしたのはわたしにしてくれたことなのである」というと、イエスがそのような人々に身をやつして人々を試すように思えるかもしれません。たとえば水戸黄門や遠山の金さん、乞食王子のように。「なんだ、行商の薬問屋のじじいか。邪魔するな！」「この葵の紋が目に入らぬか！」「ははーっ」という光景が目に浮かびますね。そのような物語は「偉い人かもしれないのでどんな人にも親切にしなさい」という教訓となっています。しかしある神父さんが「その人をキリストだと思って愛するのではない、その人はその人なのだ」おっしゃっていましたが、その通りだと思います。キリストだから愛するのではなく、人を愛することによってキリストが喜ばれる、それはキリストを愛することだ、ということなのでしょう。

世の終わりというと、恐ろしいイメージがあります。映画「ハルマゲドン」などの影響もあると思います。紀元７０年、ユダヤ戦争によってエルサレムの神殿と町が破壊された出来事は当時のユダヤ人にとっては世の終わりを思わせる出来事であったことでしょう。新約聖書に記されている世の終わりの描写にもこのときの悲惨な様子が反映されていると考えられます。しかし、神殿の破壊はユダヤ人キリスト者にとっては、聖書に記されているように、イエスこそが新しい神殿であるという信仰を広げる機会にもなったと思われます。そのように、世の終わりは古い社会秩序から新しい社会秩序へと変わるときでもあります。財産や地位を持つ者が権力をふるう世界が崩壊し、苦しみを受けている人々が中心に引き上げられる世界へと変わるのです。それは、権力に頼る人々にとっては世界の終わりに等しいことかもしれません。

イエスは、「神の国は実にあなた方の間にあるのだ」と教えられました。「ハルマゲドン」というと世の終わりが外からやってくるイメージが強いですが、イエスが告げられた神の国は、わたしたちの世界の中にすでに存在しているのです。今日の福音で、苦しみを受けている人に手を差し伸べる人はキリストの友として神の国に招かれます。しかしそれは同時に、お互いに助け合うところはすでに神の国であるということを表しています。子ども食堂や学習支援、災害ボランティアなど、あちこちに生まれている小さな神の国に心を留めながら、ともに神の国を広げていきましょう。　　（柳本神父）